

マルコ・ポーロ、
玄奘三蔵と並ぶ
世界史の人
慈覚大師円仁が
開いた。



慈覚大師円仁

四寺を開いた慈覚大師円仁(794-864年)は、日本を代表する宗教者です。

838年～847年に入唐した円仁は、『入唐求法巡礼行記(にっとうごほうじゅんれいこうき)』を残しました。

長く駐日大使を務めた歴史学者ライシャワー博士は、この書に注目し、円仁をマルコ・ポーロ(『東方見聞録』)、玄奘三蔵(『大唐西域記』)と並ぶ世界史上の人として世界に紹介したのです。

帰国後、第三代天台座主となった円仁は、この前後に東北布教の旅を敢行(これは、830年、出羽を中心とする東北地方で大きな地震があり、その被災者の救済に尽力するものだったとも伝えられています)。円仁によって開かれた瑞巖寺、中尊寺、毛越寺、立石寺から、みちのくに仏教思想が広まってゆくののです。



中尊寺/金色堂



毛越寺/常行堂



瑞巖寺/上段の間



立石寺/蟬塚

四寺廻廊
芭蕉の足跡を
巡る。



松島や 鶴に身を借れほととぎす
夏草や 兵どもが夢の跡
五月雨の 降残してや光堂
閑さや 岩にしみ入る蟬の声
芭蕉 曾良

芭蕉の奥の細道は、
「四寺廻廊」を巡る旅だった。

1689(元禄2)年、旧暦3月27日。松尾芭蕉は、
『奥の細道』の旅へと足を踏み出しました。

一説には、1189年、平泉高館に自刃した源義経の
500回忌を意識した旅ともいわれています。

その折りに、同行の曾良の句も含めて見事な句が詠まれ
今に伝えられています。

【四寺廻廊を巡る旅は、JR・観光バスなどがオススメ】

中尊寺・毛越寺

- 「平泉駅」から中尊寺へは徒歩20分、毛越寺へは徒歩10分、
中尊寺～毛越寺は徒歩20分
- 東北新幹線一ノ関駅から「平泉世界遺産めぐり」定期観光バス
(問合せ=岩手県交通0191-23-4250)

瑞巖寺

- 「松島海岸駅」から徒歩5分
- 東北新幹線仙台駅前から「松島めぐり」定期観光バス
(問合せ=宮城交通022-267-1777)

立石寺

- 「山寺駅」から徒歩7分

●お問い合わせ先
四寺廻廊事務局(中尊寺内)【電話】0191(46)2211
お問い合わせ時間/9:00～16:00(年中無休)

「みちのく古寺巡礼 四寺廻廊」
ホームページ

四寺廻廊 検索

四寺廻廊
SHIJI KAIROU

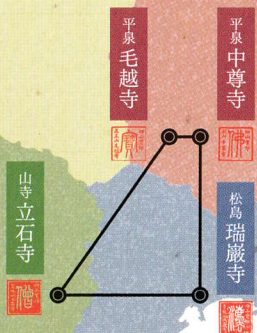
四寺廻廊

こころ穏やかに、巡る旅。



四寺廻廊

こころ穏やかに、巡る旅。



860(貞観3)年 山寺・立石寺

清和天皇勅願寺として開かれた立石寺は、慈覚大師が比叡山別院として延暦寺の法灯を移した学問修行の山岳仏教の霊地。宗教文化遺産の山寺です。



冬の立石寺

828(天長5)年 松島・瑞巖寺

瑞巖寺伝来の『天台記』によると、慈覚大師が日吉山王社の神輿を先頭に、三千の学生・堂衆を率いて下向、創立し、淳和天皇の勅願寺となった、と伝えられています。



瑞巖寺本堂 室中孔雀の間



850(嘉祥3)年 平泉・中尊寺

寺伝によると、嘉祥3年に関山弘台寿院という草庵が開かれたのが中尊寺の開基です。奥州藤原氏の時代には、堂塔40余、僧房300余という大伽藍でした。



中尊寺／経蔵



850(嘉祥3)年 平泉・毛越寺

寺伝によれば、東北巡遊の折、深い霧のため進めなくなっていた慈覚大師が白鹿の毛に導かれ、白髪の老人と出会い一字の堂を建立。嘉祥寺と名づけたのが開山です。



毛越寺／曲水の宴

世界に誇る 歴史遺産・文化遺産の宝庫

慈覚大師円仁が開いた〈四寺〉は東北地方有数の歴史、文化を有しています。



中尊寺金色堂(国宝)



毛越寺(特別史跡・特別名勝)



立石寺本堂(重要文化財)



瑞巖寺本堂(国宝)



瑞巖寺庫裡・回廊(国宝)



松島／五大堂(重要文化財)

— その他歴史遺産・文化遺産 —

- 平泉の文化遺産(世界文化遺産) ●中尊寺(特別史跡)
- 立石寺(名勝史跡) ●瑞巖寺御成門、中門、太鼓堀(重要文化財)
- 松島(特別名勝)

御朱印

ごしゅいん

御朱印は、お写経を納めた証としてお寺のご本尊の宝印を頂戴するものでした。現在では寺社参拝の記念として旅行の楽しみの一つともなっています。

四寺廻廊(中尊寺・瑞巖寺・立石寺・毛越寺)参拝の御朱印が、松島瑞巖寺の臥竜梅の木から作られました。大変由緒深い御印です。すべての御朱印を集められますと結願の御印と住職の色紙をさしあげます。



浄 忍 尊

住職の色紙

四寺廻廊写経

しじかいらうしやきよう

日本における写経の習慣は、慈覚大師によって修行の一環として弘められました。四寺では「四寺廻廊一卷写経 般若心経」を頒布。写経用紙に経文を写し、寺に納められた方に、納経の証として四寺廻廊守り札を授与いたします。心を静め、一字一句を丁寧に書き写すことにより、仏教の真髄にふれられることでしょう。

